第1617回（7月26日）

ヤマギシにおける高付加価値型・複合的循環農業の実践

足　立　恭一郎

若者の農業離れ，3Kイメージの定着，高齢化，嫁不足，農業・農村の活力の低下，将来展望の喪失など，いまや繰り言ばかりを耳にする日本農業だが，その中にあって，「ヤマギシ」には若いエネルギーが溢れている。

ヤマギシとは，自然と人為の調和をめざす理想社会の実現を提案した，山岸巳代蔵（1901～61年）によって1953年に組織された，農林畜産業・農産加工を中心とする「財布一つの共同生活農場」のこと。国内34カ所，海外7カ所に「ヤマギシズム生活実顕地」と称する農場があり，乳幼児を含む4,736名（うち海外125名）が生活している。

北海道から九州までほぼ全国に分布する実顕地は，27の農事組合法人として登録され，1993年度の総事業規模は採卵鶏136万羽，肉鶏24万羽，乳牛3,900頭，肉牛3,500頭，豚41,000頭，水田170 ha，野菜畑300 ha，果樹園100 ha，牧草地790 ha，森林1,400 ha。生産物は「供給所」と呼ばれる63の配送所から共同購入グループに供給される。その他，移動販売車，デパートの常設店やヤマギシ・フェア，宅配等を通じて販売され，公称100万の消費者がヤマギシの生産物を利用する。総売上高は供給が開始された翌年の1976年度8億円，10年後の85年度59億円，91年度128億円と，その急増ぶりは目覚ましい。

ヤマギシの事業の特徴は「人およびモノの無駄のない循環」にある。農業に農繁期はつきものだが，作物生長の適期に合わせた「職場間・実顕地間の援農体制」（人の循環）が確立しており，適期に収穫されるヤマギシの完熟作物は味がよく，消費者の評価が高い。

ヤマギシには農業，林業，畜産，酪農，牛乳・農産加工，家畜診療所，運輸，建設，出版，コンピューター・ソフト開発，食堂など20数種の職場があり，2,000名強の成人が配属されているが，それに加え，実質的な労働力として「ヤマギシズム学園」の高等部生以上440名の果たす役割が大きい。

学園は文部省認可の学校ではないが幼年部から大学部まである（全園生約2,400名）。学園附属施設として三重県下に78 haの圃場と60 haの演習林，大潟村に68 haの大学部演習圃場（水田）があり，実学の場・後継者づくりの場として機能している。ヤマギシの果樹は高等部生，稲作は大学部生（70名）によって支えられ，作業適期に全国の実顕地を援農して回る「移動実学隊」は，いまやヤマギシの村には欠かせない存在となっている。しかも学園生の大半は「ヤマギシの村に魅せられた消費者」の子弟たちであり，100万の消費者は生産物の“供給先”であると同時に学園生の重要な“供給源”として機能している。

「モノの循環」について言えば，≪林業・製材副産物（樹皮，チップ，オガ屑），農業残滓（稲藁，籾殻，野菜屑），食品副産物・外食産業や台所の残滓（オカラ，パン屑，醤油粕，残飯等）⇨敷料，飼料⇨堆厩肥⇨実顕地の圃場への施用，地域農家の農業残滓との交換≫という，①小さい循環（実顕地内の自己完結型の有機物循環）と②大きな循環（食品産業や地域農家など地域社会と繋がる開放型の有機物循環）が確立し，また生産物の全活用を図るため≪一般農家では通常廃棄される規格外農産物や破卵，売れ残りやすい牛・豚・鶏の特定部位肉，卵や牛乳の季節的供給過剰⇨各種加工食品開発≫を行い，結果的に生産物の付加価値を高めている。

財布一つの共同生活は特異であり，ヤマギシの元参画者による厳しい内部批判も散見されるが，重要なことは，ヤマギシの実践から日本農業活性化のヒントを如何に見出し普遍化するかにある。そのキーワードは「農村と都市の“提携”」にある，と筆者は考える。